

會



報

1959年7月

204

日本山岳會

ヒマルチュリ
キャラバン日誌

第一信

カトマンズにて

田辺 寿

三月十日 十二時五十分パトナより荷物輸送に当る松田隊員を除いて村木隊長以下六名空路無事カトマンズに到着した。機上より雲の上へ遠くヒマラヤを望み、はじめてのわれわれは狭い機の中を右に左に小さな窓にしがみついて驚喜した。

カトマンズにおいて、そこにフランス隊のリーダー、ジャン・フランコを見た時は、いよいよヒマラヤ近くの感を強くした。村木隊長といろいろ話していたが、われわれ若い隊員は離れたところからジャヌー、ヒマルチュリ両隊長の会見を、まぶしく見ていた。中肉中背のフランコは大きなサングラスにしやれたツイードの背広、これに配するに半ズボンに開襟シャツのわれらが隊長、背丈は村木隊長の方がいく分大きく、ヒマラヤ仲間にも名の通ったフランコにやささかもひけをとらず、われわれ若い隊員はすっかり嬉しくなりました。

それから十日間荷物受け取りのためこの飛行場に通ううちに例の「チベットの七年」に出てくるアフ・シュナイダーや深田隊の会ったランタインのチーズ作りにも

会い、インド大使館パント氏の招宴の席上ではアルバイン・クラブのロバーツ氏に会うなど、次々にこれまで色んな本で読んだヒマラヤの猛者に会ってすっかりヒマラヤ気分です。

いきなりカトマンズの印象から始めたが出発に当つては色々と有難うございました。こうしてヒマラヤに参り、喜びが強ければ強いほど感謝の念を新たにしております。個々にお便りを差し上げねばならないのですが、何分にも忙しいので、これから若い隊員が交代で会報紙上にお便り致しますからそれでお許し下さい。

船旅は至極無事に終り、ホンコン、シンガポール、ベナン、ラングーンと到る所で在留邦人の方々の世話になり愉快に過ぎていた。ただ、三月八日夕刻ラングーンより先発した村木、松田の二名と合し無事インドの一角に第一歩を踏みました。八日の夜は領事館の歓迎の宴にのぞみ、リットン・ホテルに泊りました。すでに先発の二名により、通関その他の手配がすすんでいたのも、本隊は九日朝からネパール領事館をまわり、さらに手わけをして食糧の買出し、荷あげの監督を行い、十九時四十五分にはやら香りの良い花のレイをインド美人にかけて貰い多勢の方々のお見送りを受けてカルカッタを立ちました。パトナ着十日七時五十分、すぐに飛行場に向い十二時二十分陸送してくる荷物のために松田隊員を残し、他七名は空路カトマンズに入つた次第です。今年のヒマラヤ登山もようやく盛んです。ジャヌーにはフランコ

のフランス隊がサーダー、オンデーム以下をひきつけて行動を起しアマダブラムに向う英国隊も近日中到着。さらにボンベイに上陸したダウラギリに向うオーストリア隊は、松田隊員がパトナで会つた話ではリーダー、ガッシャーブルムのフリッツ・モラバークで平均年齢二十六才というわれわれよりさらに若い隊で、サーダーはパサン・ダワ・ラマ、以下十二名の新しいシェルパとのことです。そしてヒマルチュリに向うわれわれもガルツェン、パサン・プターール、ラクパ・テンジン、グエデイ、パサン・プターール、アン・ダワ、パサン・テンド、ダワ・トンデツプとダージリンから六名のローカル・シェルパをむかえ、いよいよ本格的な行動に入ります。総計百四十個の荷物は三月十六日カトマンズに終結を待っています。

こちらにつくまでいろいろな方面からの情報で心配をかけた。シエルパの問題は、連日村木隊長が外務省に足を運びましたが、当のネパール・ヒマラヤン・ソサエティーの発起人が幸い不在であり、さらにそれを後押ししていた現外務大臣が恐らく選挙の結果数カ月後には変ると見られている等々の事情で当初心配していたように強力にダージリン・シェルパの登山を拒む意志もなく、結局理由書を一札入れて許可を貰うことが出来ました。こうして一つ一つ問題は片づいていよいよ明日はキャラバンに入ります。

(三月二十日夜)

第二信

アルガト・バザールにて

山野井武夫

三月二十一日 昨夜の寝不足のまま、あわただしい準備のうちに十時ごろ一三〇人のポーターによるキャラバンは出現した。マナスルの映画で見た時のようにすつきりした気分ではなく、ただほつとしただけだ。隊員八名、およびギアルツェン、毎日の佐藤氏、ビナヤ氏と共に一足遅れてトラックで追かける。途中リエゾン・オフイサー、ゴバー氏宅に寄つて同行する。自動車の通れる道はすぐ絶えて、いよいよ自分の足で歩く二週間のキャラバンを踏み出した。佐藤、ビナヤ両氏が見えなくなるまで手をふつて見送つてくれた。今日はカカニの丘まで半日行程。足取りも軽くなつて半日行程。足取りの肩の荷がずつしりと重い。くねくねと曲つた白っぽい急な登りを喘ぎながら登る。脈博や呼吸を数えたり、出発準備から今日までの半年のことを考えたりするうちに視界がパツと開けた。あととはだらだらと上り下りの道を行く。夜のとぼりがおりるころ、やつとカカニの丘につく。すでに張られたキャンブに荷を置いて、かねがねきいていた展望や如何にと急いで丘の頂に立つたが、残念ながら西色の雲にとぎされて殆ど見えない。がっかりしながらも明朝を期待しながら第一夜の夢を結ぶ。

三月二十二日 「見えるぞ」という声に急いで飛出したが、やは

り雲多く視界は悪い。山の中腹をしばらく巻いて下りになる。白雲母の多いやに埃つぽい道だ。暑い日差しと反射と埃に汗がどんどん湧き出る。でこぼこ道の両側に生えた多肉葉の熱帯植物や、疎毛の手を見ては木蔭にしばしば休みつくだつてゆく。モロッコを舞台にした外人部隊の映画を思い出した。やつと河原に下り着く。靴が足になじまぬせいか殆どの者がびつた喉にねばつく唾をのみ込みながらだらだらと河原の道をたどつ

(一) 隊員詮衡事情

隊員の決定についての三十三年五月理事会決定に従い、海外登山審議委員会から隊長の決定を一任された模、日高、松方三名で相談の結果、第一次乃至第三次マナスル隊に加わつて装備、通信、測量等を担当し、第三次にはサポーター隊を率いてプラトーまで登つた村木潤次郎常務理事を推すことに一致した。以後村木の手許で隊員の詮衡に当り、その構想がまとまつた上で、前記三名と協議の上候補者をきめ、十二月十二日ヒマラヤ登山準備委員会、海外登山審議委員会及び役員総会に報告承認を得たのち、新聞に発表した。

隊長と隊員の正式決定と発表が先きの都合などによるものでそのため全員のみなさんにお心配をおかけしたことを深くお詫びする次第である。

てゆく。夕方急に暗く曇り砂原の突風に会う。砂漠行進のような感じだ。水量の少いグレイ・コーラを渡りナワコットへの道を右に見ながらしばらく行くとバタ・バザールのはずれに白と黄色の嬉しいキャンプが見えた。

三月二十三日 このところ毎日七時すぎに出発。トリスリ・ガンダキの涼風に吹かれながら朝日に照らされた吊橋を渡る気分は全く爽快。トリスリ・バザールの物見高い人々と後にサマリ・パンジャンへとサマリ・コーラに沿つての

暑いだらだら道を行く。珍らしい見とれる土人、水牛のような角をした牛、沢山の小山羊をつれた山羊の群と行交ひ、左右の段々畑を眺めつつ峠に上った時は、すでに日も大分西に傾いてた。途中砂埃にザラザラする口に喰べたパイアの味と冷たさは忘れられない。峠を少しくくだつて、溪谷のほとり段々畑の中にキャンプする。夕日が美しい。

三月二十四日 気分よよい空腹の朝、隊員は皆健康そのもの。足の痛みも次第に落着いてきた。

今日はカトンジェの峠を越える。峠からの景観を期待しながら石の多い赤土の登りを辿る。期待を裏切られること二度。やつと三度目に白く蛇行するアंक・コーラを足下にした。途中寒いような俄雨にあらう。今年は気候が遅れているらしく、今まで渡ってきた川はいずれも水が少く濁つていない。雨上りの新緑の間に見えるガネッシュ・ヒマールの雪をつけた中腹が実に鮮明だ。昼弁当がうまい。アंक・コーラを眺めながら美

ヒマルチュリ登山隊員詮衡事情

その他報告

日高信六郎

ラヤの経験者をふやし、わが登山界に貢献しようとの今次遠征の趣旨をも考慮すべきであるから、この双方をくみあわせて、村木がねり上げた苦心の結果が、これである。隊長のほか第一次に七五〇米まで登つた三人男の一人である石坂、第二次、第三次にわたり装備管理企画等万端の処理に当つた松田という経験者三人に対し、あらず四人であるが、いずれも内地の

(二) ヒマラヤ登山準備委員会

前記の事情で隊長と隊員の発表が出来ることとなつたので、会報第一九八号所報委員会の実行委

員に隊員候補者を主とする委員を追加し、十月十五日準備委員会第二次会合以降、連日大忙になつて、準備や食糧の調達、テスト、整理梱包などに努め、本年二月六日横浜港で京船サンゴラ号に積込を了つた。会社と船長の厚意により船倉に持込まなくてすんだのは大いに助かつた。

実行委員は左の通り（〇印は新に委嘱）

総務（兼通信）村木潤次郎

庶務（兼経理、渉外補佐）松田雄一

装備 金坂一郎 大塚博美

〇初見一雄 〇田辺 寿

〇竹田寛次 〇高橋 進

〇石坂昭二 〇日下田実

〇山野井武夫

医療酸素 辰沼広吉 篠田軍治

〇徳永篤司 〇住吉仙也

〇尾藤昭二

(三)

資金方面については、早川種三評議員が資金委員長の名義で外部との折衝に当つてゐる。以上大変おそくなりましたが御報告いたします。

しい緑に彩られた道を下る。三分の二ほどおりたあたり沙羅双樹にかこまれながら今日のキャンプ地チャンネ・フェデーに黄色と白の天幕が出現するのを眺める。夕方から雨となる。

三月二十五日 少し歩いてアंक・コーラにゴム・ボートを浮べる。シネラマの実演、アंक・コーラに挑戦、松田、田辺、ギャルツェンに小生と四人乗る。びしょ濡れ覚悟で荷物はなし。静かなところはとも角、早瀬になると結構スリル満点。泳ぎを知らぬギャルツェンはずつとロープにしがみついている。『ネバーマイン、アイ・アム・グッド・スイマー、パット・アト、マウンテンヘルプ・ミー、プリーズ』とは田辺の言。

田辺と小生は着のみのまま飛びこむこと一度。昼前サレンタールの登り口で皆と一語になる。ポーター達はすでに見えぬが今日の行程はもう長くない、明日一日休養とあつて、河原で甲羅乾しときめこむ。信号筒をドカンとやつては魚をとつたり昼寝をしたり二時ごろやつとみこしを上げる。

今年はずいぶんいいのか、またはかねがね聞いて覚悟していたためサレンタールの丘の登りは苦にならず、登りの上の方は潤葉樹の大木が緑の芝に蔭を作り、その間を赤っぽい小路がうねり、ところどころ湧き出る水のほとりには丸い素焼きのつぼをかかえた娘が集つている。実に浮世離れした風景だ。それに引きかえ、こちらの連中は汗と埃にまみれた服装に、むくつけき向うづねを出し異様にいかい黄色のリュックを背にあえい

でいる。

とうとうブリガンダキを足下に見下ろした。マナスル山群の氷河の水を集めて、今ここに流れていると思うと姿は見えないがヒマルチュリ遠からず。やはり水は濁っていない。一気に下り、右手に長くブリガンダキに陰を落す吊橋を渡つてアルガト・バザールに入る。明日は一日ゆつくり休養だ。食後の話ははずむ。

第三信

ニヤックにて

山野井武夫

三月二十六日 アルガト・バザールにて休養。午前中荷物の計量と再梱包、午後は各自資料の整理、手紙書きなどに費やす。ドクターの所へは朝から患者が押しかけてくる。卵など持つてくる殊勝な者もいたが、大部分は手ぶら。薬のもらい得とばかりに來た連中である。ドクター、人数の割にもらいが少いね。などと口の悪いのにはわが住吉ドクターは苦り切つていた。他の隊員も天幕のところにへ見物に來た連中にじやまをされて落着いた仕事も出来ない。石坂、山野井はサードと共に食糧の買出しに出かけ一週間分の米、砂糖を買つてくる。休養とはいえない一日であった。

三月二十七日 アルガト・バザール・ソナ。第一便のポストランナーを見送つてキャラバンを追いかける。村外れの王室のマンゴ園は見事である。約三十分、小沢を越すと雪山が

姿を現わす。ガネット・シユ・ヒマールである。高さよりも巾広いのに驚く。今年は雪解けが遅く、したがってブリガンダキの谷水も澄んで水量も左程多くはない。道もまだ悪いところはない。

ポーターたちは荷物が三十五キロ、それにアルガトから先の自分の食糧を持参しなければならぬので相当にこたえるらしく、ポーター頭に泣きごとをいつているが、ポーター頭の説明で納得したらしい。一生懸命歩いてくる。

いよいよチベットの世界に近づいてきた。今夕より食前に多田等觀氏吹込みのチベット語の有難いお経を聞くことになりメス天幕へサンプ、シエルバ全員集まりテーパー・レコーダーをまわす。シエルバは案外信心深く、おまけにロカル・ポーター・サードのパスン・プタールはもとラマだったとか、文句を空んじておりテーパーが終つてもなかなかやめてくれないで、腹のグウグウいつているサンプ連中をやきもきさせる。

三月二十八日 ソター・コーラック手前、出発して約二時間、ラプーというところへ出る。段々畑に大きな石がごろごろしており畑にはマカイ(とうもろこし)が芽を出している。バナナもあるが、この辺が限界である。ブリガンダキの谷へ下つたところで、前のマナスル隊と同様ザクロ石の採取に大童となりゴールド・ラッシュを再現する。

アルガトから前のマナスルに参加したチヨコンのローカル・ポーターのラクパ・ツェリンが家族一諸で道づれとなり、抜きつ、抜

かれつすつかり顔なじみになつてしまつた。煙草をくばつていようとポーターの中に混つて手を出す。油断は出来ないがにくめない愉快な連中である。

谷筋から離れてちよつとした台地に出るとクターン・ヒマールが姿を現わす。山を見てはひと休み。花が咲いているからひと休みと、休んでばかりいるが、それでも結構ポーターと同じくらいの速度である。

マチャ・コーラでソーダー・サイフオンを使い、ジャムを溶いて飲物を作る。通りがかりのシエルバやサードにアップルワイン、ジャパニーズ・ロキシーだといつたらちよつと強いが大変うまいといつて飲んでいた。ネタを知つて連中は大笑いする。コーラックまではちよつと無理なので、その少し手前で露営することとなつた。

夕刻アルガトより連絡し依頼したグルカの巡査が二名護衛に來る。三月二十九日 露营地—ヤル道ははじめブリガンダキの右岸を行く。シャワー状の温泉がありわれわれを喜ばす。サンゴ丸丸以来なので煙草をくばつて遅くつた連中はゆつくりと身体を洗う。

今日の難場はブリガンダキにかけられた橋を渡ることだつた。高い、長い、そしてふわふわとゆれ、今にも折れそう。まことに恐ろしい橋であり、ここでザイルを使う。ドニマに着く。石造りの家、チョルテン、旗、いよいよチベットの中へやつてきた。ここで中食とし、今日もジャパニーズ・ロキシーを作る。魚がいそうだからのでドカンをつまめる

が、不漁である。その故かこの河の水は特に冷たいようだつた。ヤル川の近くで雨にたたかれる。前はつと天気がよくつたところをみると余程悪者が今回の隊員の中にいるらしい。映画やスライドでなじみのヤル(上高地)は松の木の小坂を登り切るとひよつこりと眼下に素晴らしい姿を現わす。

雨でポーターたちはずぶ濡れになつてしまつたが、荷物を置くといづくともなく消えていつてしまつた。そして思いがけない方角にあちこちと彼等の燃す焚火が一晚中みられた。

三月三十日 昨日の雨で正面の山は真白になり寒々とした感を与える。出発して間もなく雨となり寒い。今日もまた念のためザイルを使い猿橋の文字通り危い橋を左岩から右岩へ渡る。ルートは悪い

ヒマルチュリ私信

村木潤次郎

三月二十六日アルガトにて休養。二十七日よりブリガンダキに登りはじめます。ナムルの情勢は風聞によるとなかなか容易ならぬものがありそうですが、まあ行けばなんとかなるだろうとのんびりかまえております。しかし万が一のこともあり得ますので、昨日グルカとナワコツ(行政上チヨコンカ)のスタッフを支配している)の奥知事に電話で援助方を申し入れ双方

ところがずつと続いている。ポーター連も真剣だ。やがて急なスラブを下り、平地を少し歩くとジャガートだ。あまりきれいでない家や家畜小屋が並んでおり中心部に政府の連絡所がある。護衛の二名はここでわれわれより一日遅れてくることとなる。ジャガートから先もまた悪い道が続く。よくもまあこんなところに道を作つたものだと思ふところだ。今日もまたセティパス着と同時に雨。

三月三十一日、セティパス滞在。夜来の雨はまだ止まず休養となる。物見高いチベットたちが天幕に押し寄せてくる。まわりをうろちよろして天幕の中をのぞきこむ。身ぶり、手ぶりで話しかける言葉は薬をくれ、そうでない奴はシガリシガリと手を合せ、にやり。

から警官が二名づつ出て、われわれの後からナムルに來てくれることになつております。ナムルへ入つてから頼んだのは一カ月後にならなければ来ないので、余り当てになりませんが、今度は殆どわれわれと同時にナムルに入ることになりますからちよつとは足になるかも知れません。

いづれにしても十分に気をつけて間違ひの起らぬようにするつもりです。われわれの目的はあくまでも山へ登ることと騒動をおこすことではありませんから、その点御安心下さい。末筆ながら会の諸先輩にくれぐれもよろしく御伝言下さい。(アルガトバザールにて、日高会長あて)

この連中に甘い顔をしていると裸にされそうなのでツアイナとつめて冷い顔をする。ドクターは今日も患者で大変だ。彼等は薬を大さきで評価するらしい。小さな新薬では喜ばない。これからとび切り大きいのを作っておくから食糧係よ粉を頼むなどと、いいながら助手のニマ・テンジンを使つて働いている。木村カメラマンはフィルム現象と今日の休養もまたけつこう忙しい一日であつた。

四月一日 セティバス・ニヤック。新雪はすぐ上までやつてきて山は美しい。カトンジェでポーターは約三十五人程帰つたので、チベツタン・グルンを補充する。ローカル・ポーター・サダーがいてもやはり荷物の奪い合いがあるらしい。カトマンズ・ポーターが帰る時、紐をもつていつてしまつたらしく、紐がないという奴もいてなかなかぎやかだ。ニヤックまで登りがつづくので六時にはポーターの先頭は出発をした。

道は昨日と同様悪い。高度感のあるところである。所々石楠花の赤い花が出てきてわれわれを喜ばせる。カカニでも、カトンジェでもヒマルチュリは見えなかつた。今日こそはとチュリリンコラまで勇んで行つたが今日も見ることが出来ない。この分ではC4までヒマルチュリの頂は見る事が出来そうもない。

ニヤックの出口の露営地に着いて間もなく例によつて雨となる。セーターを着ているわれわれでさえ寒い。リエゾンのゴバルは羽毛服を持ち出した。カトマンズ・ポーターたちはこの寒さで眠れるだ

ろうか。夜は久方ぶりに満天の星となる。

第四信

BCにて 竹田 寛次

四月二日 朝天幕をあけると久しぶりの快晴、スリンギ・ヒマールの白く輝く峰がくつきりと青空に浮びあがつてニヤックからポーターに少数づつチベツタンが加わり、段々とカトマンズ・ポーターをかえてゆくつもりである。今日も十名ばかりチヨコン、ローの部落のチベツタンがポーターの列に入つてゐる。道は相変わらずブリガンダキに沿つて大して上りもせず、綱を固定するような悪いところもない。

ビリーの部落のちよつと先によい芝地があり、そこがキャンプ・サイト、松田、住吉、山野井のサーブがなかなか着かないのでどうしたかと思つて二時間ばかり遅くなつてきて、ニヤックの裏山に登り、この日快晴のヒマルチュリを心ゆくまで眺めてきたとか、「でかいです、ちよつとしたものです」と山野井サーブは大分感激のていであつた。夕方ジャガーで別れたポストマン二人着いてこれから行を共にする。

四月三日 いよいよ問題の部落ナムルに入る日。これまでナムルに関する情報はほとんど聞いていないが、サダーのギャルツェンは「それほど悪いことはないらしい」という。ブリガンダキの両岸は切り立つた岩壁となり森林

の小道を進み、ぐんぐんと高度を上げてゆく。今日も素晴らしい天気であふれあぐまわりの山々には稜線にべつとりと雪をのせ、コバルトブルーの空、山麓の緑の畠はわれわれの一まつの不安をよそに美しく静まりかえつてゐる。例によつてチヨルテンをくぐつてナムル

の部落。道の両側には部落民がぼつりぼつりと立ちわれわれの通るのをくつと眺めてゐる。これといった表情は汲みとれなかつたが、さわらぬ神にたたりなし、早々に通りぬけた。村の一町ばかり先、流の落ちている地点にキャンプを張ると、そろそろと村民がやつてきて、天幕を無遠慮にのぞきこんだり「シグレ、シグレ」と煙草をたかつたり、うるさいのとくさいのに閉口する。そのうちサダーの友人だと称するチベツタンがやつてきて今夜部落民の会議をして明朝その話の結果を知らせにくるからといつて帰つていつた。

四月四日 朝サダーの話によると、連中の会議の結果は①テランの谷への荷上げにはナムルの者以外のポーターは使わないこと②三つのゴンパにそれぞれ五十ルピーぐらいの寄金をすること。この二つを条件として山に入るのと認めるというのだつた。三カ所のゴンパの寄金は合計一五〇ルピー、まずまずの額である。ポーターの件はわれわれの全荷物を一度いから半量づつ二日間にわたつてあけることになることと一日遅くなるが結局この条件を入れることにした。

そのため午前中は帰すネパリー・ポーターへの賃金支払いでつづれ、田辺、石坂だけが先行して、他は昼近くまでつて出発した。テランの天幕場まで三時間、ナムルの上の滝の左側を登りはじめて現われた雪の上をゆく。天幕場は三三〇〇米、チキラの峠もすぐ目の上に見える。やはりここまで上ると気温はぐつと低く夜は三度を示している。

四月五日 昨日ナムルに残した荷を上げるので朝早くからシエルバ、ローカル・ポーターが谷を下つてゆく。今日もナムルの部落民を使つて午後までに全荷物を天幕に集結。その間装備、食糧の整理をサーブと残りのシエルバでやることにした。

村木、石坂、ガルツェンはシエランを登つてBC予定地を見にゆく。大体予想した地点にBCを建設出来る見込みがついた。

今朝は雲一つない天気だつたが、午後から曇り始め、三時ごろから雪が舞い出した。雪の降る中をチベツタンのポーターが三三五五とキャンプに着いた。片つぱしから首にかけた番号と荷の番号を調べ、所定の位置に持つてゆかせ全部そろつたところで一日の賃金五ルピーと煙草二本を支給、チベツタンはネパリーのポーターのようにおとなしくないからわれわれも目を皿のようにして油断なく用心をおこたりない。降り出した雪は夜になつてもやまず、見る見る一面白の世界となつてしまつた。

四月六日 昨夜来の雪は晴れ上つて素晴らしい快晴。BC建設におあつたえむきの天気となつた。ところが昨夜ここに泊つたチベツタンはどうしたことかぞろぞろと谷をおりはじめた。どうしたのかとサダーに聞くところしつ下の岩屋で朝飯を喰つてまた上つて来るのだという。この雪でおじけつたのか、あるいはボクシスをとるためのジェスチュアであるうか。とにかくローカルポーターとシエルバも荷を背負つて出かけ、サーブがラッセル、久しぶりのアルパイトで息はずむが、もう富士山を上まわると思うと、ちよつと気持ちよい。十二時BC予定地につき、早速整地をやつて約五十日間の登山の基地であり、休息の場所となるBCを建設した。高度三九〇〇米。

第五信

石坂昭二郎

四月七日 ナムルの連中が十名ほど二往復。中には三往復もやつてくれたものもいたので、われわれのシエルバ、ポーターの分も含めてあつた二十三名を残すのみとなつたので今日でナムルの連中を解雇した。ガルツェンの友達ベンバ・ツェリンがアル（じやがいの）をかついてきてくれる。彼はわれわれのために米、ツアンバ、ギー、ヤクの肉、ニワトリ、卵などを売つてくれるので食糧係は大いに助かつてゐる。午後はちよつとガスがかかつてくるが夜はまた素晴らしい星夜だ。

四月八日 シエルバ、ポーターが二往復してここに全員装備、食糧とも無事ベース・キャンプに集

結することが出来た。ほつとした
 気持だ。BCは昨年の秋と同じと
 ころ、この前は全然雪はなかつた
 が、今は約二米の積雪、雪上のキ
 ャンプである。薪をシュランの谷
 を少し下つたところから上げてス
 トーブを使用しているので居住性
 はまあまあである。水も流れてい
 る。

ここからはヒマルチュリは見
 ない。東尾根の下部と、スリンギ
 ヒマルの遙か彼方にチベツト、
 そしてテキラゴしにクタンヒマ
 ルが美しい。カル・タール湖は氷
 つているようだ。BCが美しい緑
 と高山植物の花々にいるとられて
 しずまりかえつてくる。BCの人
 員はサーブ八名、シュルバ八名、
 シェルバの見習い六名、ソロクン
 ブのシェルバ・ポーター二名、五
 六年のマナスルで活躍したチヨ
 コンのラクパ・ツェリン、そしてわ
 れわれにはお馴染のネパリー・ポ
 ーター・カンツアとバクダバハド
 ール、リエジン・オフサイのゴ
 パルの二十八名である。当初の計
 画よりもだいぶ人員がふえたがこ
 れだけいけば先にいつてくつと有
 利になつてくるだろう。明日は隊
 長と二人でCIまで偵察にゆくこ
 とになつてゐる。シェルバ、ポー
 ターは一日休養をとつて明日から
 本格的な荷上げが始まるうとして
 いる。全員元氣である。おいおいと
 調子を上げてゆかねばなるまい。

第六信

石坂昭二郎

四月十七日 CIの南斜面はも
 うすでに雪が消えて、小指の先は
 どの可れんな、薄紫色の花が咲き
 はじめてゐる。桜草の芽らしいあ
 わい緑の新芽もそこかしこに吹き
 出している。BCへの登り下りに
 日一日と伸びてゆくそれらの若草
 を踏んではいけないとよけて通る
 のも嬉しい。

キャンブはまだ雪の上だが、あ
 たりには大分顔を出してきた。シ
 エルバがシュラフや洗濯物などを
 干しながらシェルバ・ソングを唄
 っている。何んともどかである
 岩の上に寝袋をひろげて、何と
 なく春めいてきたスリンギヒマ
 ルや、クタン・ヒマルをぼんや
 りと眺める。上のキャンブから帰
 つてくると、こうした風景がいかに
 にもやわらかく感じられる。カル
 タールの氷もとけたようだ。から
 すが盛んに仕事場の残飯をあさつ
 ている。

四月九日CI予定地に登つた
 が、シェルバがサン(木を燃やす)
 チェンドウ(米をまく)で前途を折
 つてくれる。岳友が特に作つてく
 れたワカンをはいてキャンブの前
 斜面を登り出す。登つても登つて
 も何時までもキャンブが見えてが
 つかりである。やまやま気味に登
 り切つていつた谷底に、そこから
 また左岸のモレーンの小高い
 堆石を登る。この辺は秋には雪の
 ないところ。登りきつて左に捲き
 気味に行くとデブリで形づくられ
 たちよつとした雪原に出る。秋に
 も雪が残つていたので雪崩の出た
 たまりだなど金坂隊長と話しあつ
 たものだが、まさにその通りであ
 る。ルートはここからリダンダ乗

越を旨指してダイレクトに登る。

秋は岩のガラガラしたいやなど
 ころだつたが、今は雪が一面につ
 まつてゐるので、雪崩と落石の心
 配を除いては歩きやすい道となつ
 ている。しかしさすが五〇〇〇米
 近く息が切れることは大変なもの
 だ。秋はコルにキャンブを張つた
 のだが、あまり快適な場所ではな
 いので、思いきつて東尾根に取り
 つく氷河の末端までキャンブを上
 げることとする。コルから二時間
 ほど登つてまず快適なキャンブ地
 を定める。ちょうど五千米であ
 る。約六時間ほどかかる。初日と
 してはまあまあ、歩きなれば四
 時間で歩けるだろう。東尾根への
 氷河上のルートを見渡せるし、な
 つかしいマナスル、それにP29も
 一望のうちだ。秋部落民に阻止さ
 れて入れなかつたりダランリの谷が
 遙か下に横たわつてゐる。まず一
 仕事事なんだと、隊長とドクター共
 マル暮時の赤味がかったクタンヒ
 マルをめでながらのんびり下つ
 た。氷河のあわい青さも素敵だつ
 た。

翌日から連日シェルバ、ポー
 ターによるCIへの荷上げが始ま
 った。そして十日はまた皇太子殿下
 と正田美智子さんの御結婚の日、
 国旗をかかげ、君が代を斉唱して
 皆で万才を三唱する。
 シェルバ頭のガルツェンが他の
 者と同じ荷をかついで先頭をきつ
 て登つてゆく。そのへんがいか
 も彼ららしい見事なところである。
 皆三十キロづつかついでゐる。サ
 ーブ連中は自由行動的に適当に荷
 物をかついて一日おきくらいに高
 度順化のためCIまで登ることに

なつてゐる。私はキャンブでブラ
 ブラ寝ころびながら今日もまたあ
 きもせず小島政二郎の「食いし
 ん坊」を読んでいる。木村はCI
 まで登れずに帰つてきた。少々し
 よけてゐるが、そのうちになれる
 さとなくさめる。

四月十二日 秋見落していたヒ
 マルチュリ前衛峰(ジャンダルム)
 の捲き道が気にかかると、隊長
 と二人で少し飛ばしてみることに
 した。ドクターと竹田、シェルバ
 のアンダワと共にCIに入る。前
 回よりぐつと好調に登ることが出
 来る。ドクターが特に好調のよう
 だ。顔が焼けて水ぶくれが出来は
 じめ。ドクターは鼻の頭に紙を
 はつて新案日焼け止めなんといつ
 てのんびりしている。とにかく大
 変な先生だが、山登りの腕前は確
 かのようにだ。

四月十三日は崩れそうないやな
 天気だつた。案の定九時ごろから
 悪くなりはじめ、氷河上のルート
 探索には骨が折れてくる。ドク
 ターと竹田が交替でラッセルして
 くれる。三十センチほどのラッセル
 だからかなりきつい。隊長と私は
 別のザイルで結んで後に従う。最
 初うんと西寄りには抜けてみよう
 としたが、クレバスにさえぎられて
 駄目、止まらずに荷物を置いて先遣
 隊の時のルートへと東寄りに戻つ
 たところ、古い旗竿を発見してと
 にかく中央部を突破する。そこか
 らもまた右寄りのルートに末練が
 あつて試みてもみたが、東尾根直下
 の壁にさえぎられて駄目、ガスの
 切れ目に時々壁があらわれるとび
 つくりするほどすごい。段々左寄
 りに押しやられて東尾根に出たと

ころはこの前の時よりも十米ほど
 下手だつた。ここにも秋の時の旗
 竿がさみしくガスにゆれてゐた。

予定ではここから五五五〇米峰
 を越えて五六〇〇米までキャンブ
 を進めるつもりだつたが、視界き
 かず、その上時間もせまつてい
 ので五三五〇米でストップ、ドク
 ター竹田、アンダワはBCへ下つ
 た。

四月十四日は素晴らしい好天のう
 ちに明けた。隊長がカメラを持つ
 て飛び出したが、シャッターがお
 りないといつてブツブツいついて
 いる。しからば僕のはとばかりに愛
 用のキャンオンを持ち出したら見事
 に動いてくれる。マナスル、P29
 パンブーチ、ガネツシユヒマール
 と立てつづけにシャッターを切
 っている。寒暖計は零下二十七度を示し
 ている。七時二十分またワカンを
 はいて出発する。五五五〇米峰の
 肩で下をふりむいたら昨日CIま
 で上つてきていた松田、田辺、山
 野井がもう下のキャンブまで上つ
 てきていた。「手紙がきてゐるぞ」
 と下から松田が怒鳴つてゐる。そ
 のまま登りつづける。ジャンダル
 ムが美しい。チュリンゴコーラ側
 をまいてコルにで、そこからもう
 ひと登りしたところが五六〇〇米
 の広い尾根筋だ。チュリンゴコー
 ラから素晴らしい見事な氷河が上つ
 てきているが、ずたずたに切れて
 いるのでルートにはなりそうもな
 い。

そこから広い尾根筋をゆつくり
 高度を上げてゆく。大華の雪の結
 晶がキラキラと光つて肉眼でとら
 えることが出来る。スキーを持ち
 上げた快適だ、などとぼんやり

考える。ジャンダルにはなかなか近くなれない。一分間に二十三步だから進まないのも道理だ。頂上のいかつい姿がジャンの左肩越しに見える。昼食の乾パンを喰べると頃からガスがわき出して段々に視界がきかなくなる。十四時、五九〇〇米までやつと思いでたどりついたが私の身体はエンジン・ストッブでもうとてもこれ以上ゆけそうもない。とにかく出なすことにして力なく下る。それにしてもヒマルチュリへのアプローチは長い。まずマナスルの二倍はあることだろう。赤旗を余り沢山持つてこなかったのが下りが大変だった。途中から登りのラッセルはもうすつかりなくなっているし、視界はきかないのでふらふらだ。やつと五六〇〇米までたどりついたが、天幕はない。五五五〇米峰へのトラバースもガスの中だと薄気味悪い。肩にやつと天幕をみつめてはつとす。何をやる元氣もないが、それでもぼんやりと手紙を読んだりする。頭が猛烈にいたい。とうとう飲まず喰わずで寝りこけてしまった。

朝起きてもまだ頭がぼつとしてゐる。とにかく何か喰べねばとおじやを作る。喰べたらまた眠くなつて十時まで寝てしまふ。「おいそろそろ下ろうや」という隊長の声におこされてCIIを後にする。東尾根から氷河に出たら視界がきいてきてのんびりと下ることが出来た。五九〇〇米でダウンだなんてちよつとお笑いだなどといふら考えてみる。CIから下はもう歩くのもめんどくさくなつて尻をついて滑つて下る。BCはたつた

第七信

田 辺 寿

四月十八日 昨夜は今日のぼスト・ランナーのBC発に尻を叩かれて全員で夜を徹しての手紙書きに終つたが、明けて今日はいよいよCII建設の日だ。村木隊長、石坂、ドクター、木村の隊長と二名のキツチン・ポーターを除いて他の全員でCIIに入る。降り出した雪の中で威勢のよいシエルバの働きで、あつという間に六人用一張、二人用七張とキツチン用一張が張られ、CIIの態勢は出来た。降りしきる雪の中に立ちならぶ天幕の群れはヒマルチュリへの第一歩であつた。

四月十九日 いよいよ計画後半の中心ともなるCIIの建設とCIIへの荷上げの始まる日だ。早く起きて様子を見るが、どうも芳しくなく、ごろごろするうちにシエルバたちは鼻歌まじうに荷をととのえる。それといるわけだ。松田、竹田、山野井、田辺にサード、ゲンデイがラッセルに先頭に立ち、第一陣は雪の中を赤旗に導かれてCIIに向つた。元氣なシエルバが隊員のラッセルの後にびつたりとついて、ひと押しに東尾根の主稜

に出て、ピークを二つ越し、五六〇〇米のCII予定地に着く。全員でわつしよい、わつしよい掛声をかけて雪をのけ、大きな八人用天幕とキツチン天幕を張る。八人用の大きな天幕は実に快適だ。中で踊りがおどれるくらいで、アドヴァンス・ベースとしても素晴らしい。隊員は勿論、サードまでベェリ・グッドの連発だ。CIIから彼方の雪稜のジャンダルムの肩越しに遙かヒマルチュリの主峰が重つてゐる。

四月二十日 ヒマルチュリの主峰に到達する途中東尾根にジャンダルムがある。この通過の可否は日本を出る前からヒマルチュリ登頂の一つのキー・ポイントと考えられており、船中、キヤラバンを通じて何時も隊員の関心の的であつた。

ジャンダルムを越えて最後の壁の直下にCVを進められるかどうか、比較的のんびりしてやつてきたわれわれもいよいよジャンダルムに対して次第に心のたかまりを感じた。五六〇〇米の高度は幾分の影響を与えている。まず二十日松田、竹田、田辺がCIIよりジャンダルムの偵察に向つたが、天候に妨げられ既に四月十四日村木、石坂両隊員の到達した地点にも及ばずCIIに戻つた。この日もシエルバのCIIへの荷上げは好調に続き、ベース・キャンにであつた他の隊員もCIIに入つた。

四月二十一日 再び松田、竹田、田辺の三名は昨日のラッセルを頼りにCIIを出て一段、二段と段をなす雪田を越え、ようやくジャンダルム直下に横わる広い雪を横切

り昨秋の先遣隊の到着地点より更に赤旗を進め、ジャンダルムの一角にとりつき先を確めようとするところで力尽きて後続を頼み夕暮CIIの隅に帰つた。

四月二十二日 昨日CIIに入つた村木、石坂、住吉、木村の四名は木村カメラマンを除いて昨日ついに果し得なかつたジャンダルム通過の問題を解くため、早朝CIIを出た。時々押し寄せるガスの中を好調に進み、ついにジャンダルムの側稜の乗越に到達、ジャンダルム通過の可能性と同時に主峰に到る見通しを持つに至つた。

約六二五〇米のCIIIの予定地に立つと、最後の壁は圧倒的に眼前にあり、この地点よりはずたに切れた広い氷河をしばらく下り、また登り、壁直下にはるかに物凄く、三カ所ほど逆層様に切れた雪の壁は絶望的にも近い様相を呈している。日本を出て以来ジャンダルムの周辺はわれわれにとつて不気味なブランクであつた。それもうついにわれわれはこの眼で確かめた。

こうしてヒマルチュリのパールも一枚一枚はがれてゆく。最後の壁のルートはまだ確かではない。しかしとにかくわれわれ自身の眼でこれを判断し得る今、何らかの路を求め得ることは困難ではない。

こうして四月十八日に始つた第二期の高度馴化と、ジャンダルムの偵察、CIIへの荷上げは成功のうちに終り、四月二十二日、二十三日の二日間全員BCに下り休養に入つた。

最近の

フランス登山界

近 藤 等

一九五八年のシーズン

ここ数年間、夏のシーズンのアルプスの天候は不良状態がつづいてきたが、昨年の夏は六年ぶりに、どうやらいくらかは行動できるシーズンの方であつた。この結果、アルプスでは、いくつもの新しい登攀が記録された。フランス・アルプスに限定しないで、その主なものでも列記してみると、まず七月末から八月月上旬にかけて、晴天の暑い日がつづいたため、北壁が比較的良好コンディションになり、一九五二年以来登られなかつたグラランド・ジョラスの北壁のウォーカー・バットレスが、八月十五日から十八日にかけて、二つのフランス隊と、一つのドイツ隊によつて登られている。これは第十七登から十九登となる。

また同じくグラランド・ジョラスの北壁の一部であり、今日まで未登であつた、マルガリート・ピークとヤング・ピークの北壁が、初登されていることも一九五八年度のシーズンの大収穫であつた。前者は、八月五日から六日にかけてジャン・クジョーとルネ・ドメゾンのフランス隊によつて初登されたもの。標高差は八〇〇メートル、岩と氷のミックスで使用ピトン三十

五本、所要時間十五時間で上半部が困難であつたという。

一方、ヤング・ピークの北壁は八月十四日、カヴァリンリとメラのイタリア隊によつて初登されたもので、標高差は四五〇メートル、ほとんど岩場で所要時間は七時間。グラント・ジョラスの北壁のうちでは最も短かく、今後は多数登られることが予想されている。

ギド・マニョヌの一行によつて初登されたドリユの西壁は、その後、非常に人気を呼び、一九五八年夏はすでに第十一登を迎え、一方イタリアの名ガイド、ボナティが単独初登した西北稜はすでに第六登がなされた。

舞台をオーバランドに移すと、アイガーの北壁が第十三登を迎えている。八月五日から六日にかけて、オーストリア人、ダイエンベルガーとステファン兩名によつて成功されたもので、五月は天候がよかつたものの、六月はついに荒れて、夜の八時に辛うじて頂上に抜け出た模様である。

ドロミチにおける最大の収獲は、チマ・グランデ・ディ・ラヴァレロの北壁の直登ルートで、これまでのルートより、向つて左側に開拓されたもので、七月六日から十日にかけて四名のドイツ・オーストリアのクライマーが交代でルート工作に従事し、使用ピトン約二〇〇本、埋込みボルト十五本によつて完登された。このルートは、昨夏直ちにジャン・クジールネ・ドメゾンのフランス隊、二つのイタリア隊、一つのスイス隊によつてくりかえされたが、技術

的にみて最高のものに属している。

ジャン・クジールの死

アンナブルナ隊に最年少者として参加し一九五四年には、マカール偵察隊に参加、チオモ・ロンゾ（七七九六メートル）の初登に成功し、五年のマカール隊では、第一登攀隊としてトレイとともにマカールの頂上をふんまえ帰国後は、ルネ・ドメゾンと組んで、ドリユの西壁の冬季初登（四晩のピヴァークで完登）をはじめ、輝やかしい初登の数々を記録し現在、フランスのアマチュア登山家として最高の活躍をしていたジャン・クジールが昨年十一月二日、オート・アルプスのオルーズ山塊にあるクレール・デ・ペルジュの南西壁を「ジャン・ピュイズ」と登攀中、音もなく落ちて来た落石が頭部に命中し、一瞬にして他界した。謹んで哀悼の意を表したい。

ジャヌー 一九五九年

ダージリンからも遠望されるジャヌーは東ネパールはカンチェンジュンガの西に位置する七七一〇メートルのおそるべきピークで、昨年の秋、ギド・マニョヌ、J・プーリ、P・ルールのマカール隊で活躍した三名が各方面より偵察をすまし（とくに、南東のヤルン側、南西のヤマタリ氷河側、北面のジャヌ氷河側）その結果今日までヒマラヤで果たされた登攀とし

ては、ムスタグ・タワよりも悪く、技術的に非常に困難なピークである結論が出た。

本年度の隊は、隊長ジャン・フランコ、副隊長リオネル・トレイジャン・ブービエ、ルネ・ドメゾン、モーリス・ルノアール、ピエール・ルルー、ギド・マニョヌ、ロベール・パラゴ、科学班三名から構成されている。いずれも超一流のアルピニストばかりである。一行は二月二八日にフランスを出発し、カトマンズではヒマルチユリ隊の村木君と会談した模様で、現在の登攀の進展ぶりは、隊長フランコ氏からの四月二四日附の小学生宛の私信によれば、第一キャンプは四八〇〇メートルに建設、五八〇〇メートルまでのルート工作をすまし、目下全員第一キャンプに集結、さらにルート工作の完成に取りかかるとのことである。

本年度のアタックは、ジャヌーの南面および南西面（ヤマタリ氷河）からなされているもので、難場は標高差三〇〇〇メートルにおよび、その主なる急峻な岩稜、六五〇〇メートルの急峻な岩稜、六五〇〇メートル附近の上部盆地に抜け出す急峻な氷壁、さらに標高差五〇〇メートル以上の頂上までのコースの三つとされている。

最高のテクニシアンを集めたフランス隊が、これらの障害をどのように処理するかは、大いに期待されている。（ジャヌー隊はついに登れず引返している）

国際アルピニスト親睦会

今夏、フランス山岳連盟、フランス山岳会（G・H・M）主催で七月十五日より八月一日まで、シャモニで国際アルピニスト親睦会が開催される。この会合はG・H・Mに属する各国のアルピニストその他を一堂につぎ二名フランス側より招待するもので、宿舎はフランス国立登山スキー学校。この学校に合宿して、モン・ブラン山の第四級、および第五級の難しさの登攀を国際パティで実施しようというもので、この間の費用は一切フランス側が負担することになっている。この会合に日本からも二名招待したいからの依頼があつたので、実際に出席し、かつ四、五級の登攀をこなせる本会会員として、すでに昨年渡仏し、目下シャモニ・クローボのプロヴイエ夫人宅に滞在し今春、国立登山スキー学校のスキー・コーチの訓練を一月受講した安田十四雄君と、同じく今冬二週間の講習に参加した岡村崔君の兩名をすいせんとおいた。期日が切迫しているため本会理事会に報告せずこの処置を取らざるを得なかつたことをお詫し願いたい。

ヒマルチユリ隊帰国

村木隊長以下八名のヒマルチユリ隊員は五月二十一日、石坂松田の二隊員によつてアタックされたが、登頂ならなかつた。隊員は七月六日十七時にエア・インディアで全員無事帰国。

★図書紹介★

氷河への旅

ジュガール・ヒマール
探査行

深田久彌・風見武秀共著

昨年の春ジュガール・ヒマールへ出かけられた深田さん等四人組の探査行は、ヒマラヤに思いをはせている日本の登山者を羨ましがらせたが、その第一著が深田氏の文章と風見氏の写真という組み合わせで出版された。

深田氏の文章はかつて朝日新聞に連載されたものを基とし、それに相当量の加筆がほどこされている。淡々と語られていくなかに、ヒマラヤへの強い情熱がこめられ、それが一つのはつきりした心樞となつているので山頂に達した紀行ではないが、読者は十二分にひきつけられ、ヒマラヤへの夢をかきたてられるのである。しかし、ヒマラヤにあこがれた多くの人々がなし得なかつたブライベイトな旅行をやつた深田氏は、それだけに人一倍苦労をされたようである。例えば、旅先からも家族の生活費のことまでこまごまと心配した手紙をしばしば書いていたほどである。

本文の紀行と同じように、或いはそれ以上に、私は最後のヒマラヤに魅せられた人々を興味深く読んだ。ここには自分の力でヒマラヤまで出掛けた深田氏のなまの声が若人にたいして語られている。本書の今一つの要素である写真

はすべて、メンバーの一人だった風見氏の作になるものである。精力的な同氏は素人の到底想像も出来ない分量を撮影されたようだが、本書にはカラーで八枚、モノクロームで大小七〇枚の多くの印画が収載され、写真集としても十分たのしめるものとなつてゐるし、また深田氏の文章と相まつて、このヒマラヤ紀行のありのままの姿をよく伝えている。写真は一つ一つがなかなか傑作揃いで印刷も悪くないが、強いて言えば、カラーとモノクロームの写真に殆んど同じ構図のものが重複していることだ。例えば対一〇四頁の中央稜無名峯のカラーは一七と一三二頁の間に同じモノクロームがありブルビ・チャチュもそのような重複があつた。これらは思いきつてどちらかをはずさ、他のものを入れた方がよくなるかつたろうか。

山川勇一郎氏の画は他に計画があるためか一点も入らず、同氏が序文だけを書いてゐることも、かえつて効果的だ。

造本の面では相当良い点をついてゐると思う。本文の紙質、印刷、組み方など細かい点に気が配られたスマートな出来である。内容と相まつて世界のヒマラヤ文獻と肩をならべても優秀な出来の部類に入るであらう。

ただ、慾を言えば写真の説明だけでなく英文がついていたら、このままで海外でも話題にされたらうに思う。

深田氏はさらに詳しい報告の刊行を準備されてゐると聞く。それも立派な出来であることを祈る。
B5版一八七頁 一九五九年三

月 朋文堂発行 八五〇円

謎の山・アムネ・マチン

J・クラーク著

水谷 準訳

謎の山、アムネ・マチンは一つの点を除いては決して謎の山ではない。その一つの点とは高度である。一九四九年五月六日にプリンス・ドルジェが現地であつた高度は九〇四・四米（エヴェレストは八八四〇米）であるが、精密な器具ではなかつたのでこれには上下に七六二米の誤差の可能性が認められるらしい。従つてアムネ・マチンの高度は九八〇三米と八二七九米の間にあるものようである、としておこう。

世上クラーク等の探検行に疑問をもつてゐる向きもあるようであるが、実際にあの附近を通つた人達の紀行文をみても、クラークの書いてゐることがそう出たらめだとは思えない。

それはそれとして今度水谷氏が訳出したものは可なり立派な出来だといつて差支えない。誤訳もないようだし、校正渡れも大してない。まず安心して読める。シナ人や東干人の名は仮の漢字を持つて来ているところもあるようであるが、地名についてはよく勉強してゐるし、ところどころに挿入してある訳注も親切である。宗教関係のことも煩をいわず省略も殆んどなしに訳してゐる。

私自身もこの本の最後のところに一頁ばかり「解説」なるものを書いてゐるが、本当はもう少しスペースを貰つてアムネ・マチン附

近に関係ある探検概史を書いた方がよかつたと思つてゐる。だが、依頼された枚数ではそれも出来なかつた。篤志家は山と溪谷社発行の「岩と雪」第二号を見て頂きたい。

クラークのこの著の翻訳は最初京大探検部の若い人達が共同で行つて出すことになり、梅棹氏あたりと私は手紙で出版のことについて打合せてゐた。

出版社もベースボール・マガジン社と決めてゐたのであつた。然し、探検部の人達も実際の探検活動で忙がなかつたりして翻訳の仕事もなかなか渉らなかつた。結局は完了したのだが、世に出たものはその原稿ではなかつたらしい。

それは兎に角としてクラーク大佐といふのは第二次大戦中、日本軍の背後にあつてゲリラを指導してゐただけであつて、勇気もあり胆力も備わり知慧も人並以上に持つてゐる優れた冒険家である。中共軍の林彪がその精鋭を率いて南下してゐる情勢下にあつて（その故にまた出来たのかも知れないが）よく回教の鼻雄馬歩芳將軍を説いてあれだけの遠征を、探検を丸つきりものでもクラークにしても命懸けであつたことには間違いない。若し林彪軍の方が早く西寧にでも入つてゐたなら捕えられて殺されるか、あてもない西方または南方への旅へ出なければならなかつたらう。いずれにしろ運のいい男ではある。

日本でも二年ばかり前に一度アムネ・マチンへの遠征を企てたこ

ともあるようだが、結局政治情勢もからんで実現には至らなかつた。最近ではまた北京大学の創設に力を尽した有力学者を動かし毛沢東や周恩来あたりにも働きかけようとする動きもあるようだ。必ずしも登山ばかりを目的とするものではないらしいが、今のような日中関係ではなかなか難かしいのではなからうか。

今では自動車道路も完成し、位置もつきまじつており、高さも大体八千メートルときまれば、登る方の準備は予め計算出来よう。一日も早く平和な時が戻つて日中合同の遠征隊が送れる日の来ることを心から希つてゐる次第である。

ベースボール・マガジン社発行

ニマ・テンシン死去

ヒマルチュリ登山隊のシェールパニマ・テンシン（三一）は五月四日第二キャンプで略血して死亡した。五日全員で彼の遺体を氷河に葬つた。

本会ではこれに対し会長名において弔電を発し哀悼の意を表すると共に、村木隊長に激励の意を伝えた。

レンズ・フット

藤島 敏男

「御無沙汰しております。実は今年の正月四日父不見山の頂上から杉ノ峠へ下りかけるときに拾ひました写真機のカードが、貴台のものであることが判りましたのでお送りします。二日にビシヤモン

（白石山）三日に二子山、四日に坂丸峠から父不見と、のんきに歩いて来ました。只今から荷造りをして、岩苔、エボシ、笠法師の縦走を試みるために出かけます。父不見に同行した大谷一良君（JAC）からもよろしくのことです。大谷君たちとやつてゐる小型の雑誌の最近のもの一部同封いたします。右取り急ぎ。二月六日」

会員の串田孫一君からこの手紙と一緒に、僕が山で失くしたレンズ・フットが「まいんべるく・グイナスの上靴」という山の同人雑誌、それはミニオンとかコケットとか形容したい小冊子」を同伴につれて、僕の手許に戻つてきた。一体これはどうしたことなのだろう。

× × ×
正月前後のスキー地などは、人混みほどうれいというような性癖でもなければ、近よるべきでないとおもうし、重荷を担いで腰までもぐる雪をかきわけも苦手だし、あまり人通りの多くない山村、山頂と静かであるきたいという、僕の希望がいられれて一月三日早朝東京をはなれた。

三峰線皆野からバス、終点の上吉田が午前九時半。時間はタップリあるし、突抜けたように冬空は晴れてゐる。いそぐことはない。杉松の植林、雑木林、桑畑、コマゴマした山ひだ、つめたさうな沢の流れ、どこにでもある、ごくありふれた平凡な道具立である。元旦になつた雪が、いくらか風情をそなへたものでないか。そんな何の奇もない風景の中をあるいて、それで結構僕はたのしい

のだ。解放感、だが何から解放されたというのか？ 日常も動めがあるでもなし、日々は休日、市井の隠者という悟りきつたようだが一個の逃避者にすぎないのだから、束縛らしいものはなにもない。都会の憂鬱など勿体ぶるほど詩人では勿論ないし、都会とは義理にもいえない東京でユウウツなどは笑止の沙汰である。しいていえば、やりきれぬ騒音、蕪雑なる大衆、濁った空気、それらのものからの解放であろう。

せまい谷合いに身をよせ合つたような、小さな長久保の部落をぬけると、径はずつと雪をふむようになる。どこかで銃声をきいた、その人達のものである。足跡が杉ノ峠までつづいていたが父不見山へは疎林、ブッシュの中を、一尺余の新雪に登りなやんだ。

頂上の眺めは、こんな低い山でもやはりはればれとしたものだった。くろくろと城砦のような両神山の向うに、秩父の主脈がえんえんと連つているのが望まれた。それをカメラににおもつたときに、僕はフッドをなくしたことに気付いたのだ。登りで新雪にふみこんで、モタモタしているときに落したにちがいない。

万場の宿で夕食前に、廊下の障子をあけて「御免下さい」と入ってきたのが、小林義正君（会員）だったのは呆れた。東京をひるごる出て万場に直行、宿の通された部屋でフスマ越しに僕たちの話声が耳に入つたというのである。いま頃こんなところを歩く物好きがあつたかと笑つたことだった。すべて筒抜けの日本式旅館も、とき

には便利なこともある。

あくる日は朝の曇り空が西ミカボ山頂に立つ頃には、すっかり晴れ上つて山上展望を充分にたのしんだ。浅間の煙、上信上越、日光の山、僕は間近に赤久縄山を望んで、黒田正夫・初子夫妻とあの山頂をふんだことを思い出した。地図の裏には大正十五年十一月二十日とある。そのとき僕たちは赤久縄に登つたあと、広河原、カブト岩、星尾峠、初谷鉾からはじめた神津牧場を訪れ、軽井沢へ出たのだった。

古るびて黄ばんだ万場図幅に、三十余年ぶりで赤い線を入れることになつて、僕はまだこんなささやかな、山ともいえない地帯のようなどころを歩いて、よろこびを見つけることが出来るのは、幸福だとも思わずにいられた。幸福だとも思わずにいられた。

西ミカボの上で小林君と別れ、投石峠、東ミカボ、石神峠と、明るい冬の午後を、何の屈託もない、軽い心をもつて進んでいった。峠を越える人もないらしく、雪に足跡はなかつた。上妹ヶ谷でバスの出るまで一時間半もあるときいて、峠をもう一つ稼がうじやないかと、温石峠を岡本へ越えた。峠の上から眺めた東ミカボ山のあわい紫紺のシルエツトが、この山あ

るきの最後の景物であつた。

フッドをなくしたことを同行の望月達夫（会員）村尾金二（元会員の）両君は知つていた。僕のカメラはコンテツサ・ネット・ピコレット、ヴェスト型、コンプルー・シャッター、ツァイス・テツサーF4.5、七五ミリ、

前玉廻転式という大変な古物であるが、購入した大正十一年当時は小型カメラの新鋭だった。いまでは取出すと人だかりがするは大げさだとしても、人が珍らしがることは請合という代物。それでもよくとれるし、軽るいし、戦後派らしくないし、山岳写真コンクールの出品する野心など毛頭ないから、大いに登用している訳だ。そのレンズ・フッドは近來大口径のレンズが多くなつて、小口径のは容易になく、やつとさがしたものだ。

これが僕の手に戻つた幸運の元は、まず元旦の雪。ブッシュの中では中々むつかしい。僕達のと串田君達まで誰も通らなかつたらしいこと。雪の足跡が乱されたならばフッドは埋もれてしまつたらう。余りワンサと人の登らぬ山の方がよいことがあるのは、これでもわかるとおもう。しかし串田君たちと僕たちとは、この山あるきの前後に会談の機会もなく、フッドが僕のもの、どうして判つたのか後日譚をきくと、望月君から父不見山という、おかしな名の山へ正月登つたことをきいたのが、たまたま大谷一良君の知人であり、一方フッドを拾得した串田・大谷両君の一行は、こんな山へ登つた酔狂人がほかにあるかと不審におもつていた矢先きだつたので、糸をたぐるようにフッドは僕の手にかえつてきたのだ。

僕はこれからもなるべく変テコな山へ、珍品をたずさえて登ることにしてしよう。こんどは財布を落しても戻つてくるにちがいない。

（一九五九年四月記）

南の山靴とスキー用品

登山とスキー行に一番主要な役目を持つ山靴とスキー靴はミナミ独得の技術最高の材料で作つたものをお奨めします。

テント
スキーと山の
服装
キスリング
サブザツク

各種取揃



スポーツ用品

ミ ナ ミ

神田小川町中央角 TEL (29) 1359

㊤ T. S. FLAVOUR



楽しい登山に スポーツにノグ
グッド一杯美味しいジュース

本品は水にとけやすく携帯に便利です。
一郵便ボリエレツトに入っています。

土 谷 商 事

東京都杉並区大宮前6ノ340

登山用具の専門店

好日山荘

中央区銀座西二ノ五
TEL 京橋(56) 3600



カワヅ・進呈

山日記について

一九五九年版山日記は、会員諸兄の絶大な御援助により年内に発行することができ、また部数も飛躍的に増大して、登山の正しい知識の普及に多少なりとも力をつくすことのできていることは感謝にたえません。

本年度版も、できうる限り誤りの少ないように努力いたしました。が、若干の訂正が指摘されましたので、ここに御指摘いただいた方に改めて謝意を表するとともに、諸兄姉の山日記を訂正していただきたくと思います。

今後、山日記に対する注文、批評を御寄せいただき、誤りを指摘していただいて、よりよいものに育てていきたいと思ひます。

一言、御詫びと御願ひまで

次に、発見しました誤りと変更、箇所をお知らせいたします。

- 二七〇頁 岩湧山山の家の連絡を河内長野市加賀田、岩湧山の家の前川鯉造とする。
- 二七〇頁 金剛山参籠所の標高一・一〇mとする。
- 二七〇頁 護摩ノ壇山山の家の泉州山長会とあるのは泉州山岳会とする。
- 二七〇頁 荒神ヶ岳参籠所の吉野郡追分村とあるのは吉野郡野迫川村とする。
- 二七〇頁 生石高原山小屋の無料冬可とあるのは無料冬可とする。

二七〇頁 山上ヶ岳宿坊竜泉寺の電洞mとあるのは電洞川とする。

二七〇頁 行者還ノ小屋の天川村・金とあるのは天川村・金とする。

二七〇頁 上多古谷奥の小屋（コクタコダニ）とあるのは（コウタコダニ）とする。

二七一頁 一行目、上多古谷奥の小屋の、ブナス出合とあるのはブナ又出合とする。

二七一頁 弥山山の家の 昭二六改を昭三六改とする。

二七一頁 深山参籠堂（ジンゼン・ザンロウドウ）を（ジンゼン・サンロウドウ）とする。

二七一頁 池川小屋の（彩迦ヶ岳）を（釈迦ヶ岳）とする。

二七一頁 大台教会の山の家の徒止五時間を徒歩五時間とする。

二七二頁 石黒谷北村林業事務所を黒石谷北村林業事務所とする。

二七二頁 大和谷研伐事業所の項三流工場研伐員宿舎とするのを、三流土場研伐従業員宿舎とする。

二七二頁 古和谷研伐事務所の項徒歩二線間とあるのを二時間とする。

図書係より

図書整理の第一段階として、夏以来森下製本の御助力により製本

を行つてまいりましたが、この度一応の製本が完了しましたので左記の通り御報告致します。これら

記

The Alpine Journal Vol. XXXIII

" Vol. XXXIV

" Vol. XXXV

" Vol. XXXVI

" Vol. XXXVII

" Vol. XXXVIII

" Vol. XXXIX

" Vol. XL

" Vol. XLI

" Vol. XLII

" Vol. XLIII

" Vol. XLIV

" Vol. XLV

" Vol. XLVI

" Vol. XLVII

" Vol. XLVIII

" Vol. XLIX

" Vol. L

" Vol. LI

" Vol. LII

" Vol. LIII

" Vol. LIV

" Vol. LV

" Vol. LVI

" Vol. LVII

" Vol. LVIII

" Vol. LIX

" Vol. LX

" Vol. LXI

" Vol. LXII

" Vol. LXIII

" Vol. LXIV

" Vol. LXV

" Vol. LXVI

" Vol. LXVII

" Vol. LXVIII

" Vol. LXIX

" Vol. LXX

山と高原 1/89 (合本五冊)

山小屋 36/125 (合本七冊)

山 1/5 (日本山岳会編) (合本)

山 142/214 (合本九冊)

山とスキー 5巻一8巻 (合本五冊)

山とスキー 26/100 (合本二冊)

山とスキー (戦時版) (合本一冊)

新ハイキング 1/48 (合本五冊)

ハイキング 17/74 (合本五冊)

アルピニズム 1/16 (合本三冊)

国立公園 一九二九/三一 (合本一冊)

" 一九四九/五六 (合本二冊)

ケルン 25/60 (合本四冊)

探検 1/3, 4/7 (合本二冊)

スキー 一九二二/一三 (合本一冊)

温泉研究 一九五五/五八 (合本一冊)

日本風景論 (再製本)

あしな (合本)

登山地図帳 (合本)

奥武蔵 (合本)

(以上一三八冊)

なおアルパインジャーナルは27/283, 285/289の五冊が欠本のため

Vol. LVI, Vol. LVIII, Vol. LIXの

三巻が合本不能の状態にあります

借用中の方は至急御返換下さい。

G・J所載のヒメラ

ヤ関係文献の索引

先頃本会宛に "An Index of

Reports on Himalaya, Tibet

and Central Asia of the Geographical Journal, vol. 1 (1893)

vol. 123 (1957)" が立命館大

学々生薬師義美君から送られてき

ました。

天山山脈（中央部）におけるソ連の登山活動

— 1927～1956 —

吉沢 一郎

ソ連の登山活動の内のパミール地方の分は会報一九七号に紹介したが、今度は待望の天山山脈中央部における昭和二年から同三年までの分を、例により「Bergsteiger」(April 19958) からお伝えしておく。他の参考文献は前回同様。なお前回の記録において、ムズターグ・アータとクングールの登頂が一九五五年になつてゐるが、これは一九五六年の方が正しいような気がする。

一九二七年

●W・W・ネムツキイ隊（四人）

・ブルジェワルスク、ナリンコル
・ティユス峠、カラギル峠、ツル
・デン、アクス谷、ブルジェワル
・スク。

一九二九年

●I・ミソウスキイ、W・グセフ
・N・ミカイロフ

・南イニルチエク氷河、メルツバ
・ヒエル湖まで。

●M・T・ポグレベツキイ隊

・南イニルチエク氷河、ハン・テ
・ンリー山麓まで。

一九三〇年

●M・T・ポグレベツキイ隊

・南イニルチエク氷河

●W・グセフ隊（四人）

・ムシユケトフ氷河、無産階級新
・聞峠、北イニルチエク氷河

●G・スホドルスキイ隊（四人）

・南イニルチエク、メルツバヒエル
・湖、北イニル、南イニル氷河。

一九三一年

●ウクライナ科学院隊（隊長M・
・T・ポグレベツキイ）

・ハンテンリー登頂、南イニル氷
・河上部。

●無産階級旅行協会（OPT E）

・中央評議会隊（隊長、G・スホ
・ドルスキイ）（六人）

・南イニルチエク、メルツバヒエル
・氷河、北イニルチエク、北方より
・ハンテンリー試登（六千米まで）

一九三二年

●モスコイ科学院隊（隊長、A・
・レタウエト）

・ジュグチャクト峠、ナリン谷、サ
・リトル（五一〇〇米）、ベトロ
・フ氷河、ジャンガルト水源、ア
・コグス峠、イシガルト峠、ブル
・ジェワルスク、アクス峠、アル
・マタ峠。

●ウクライナ科学院隊（隊長、M・
・T・ポグレベツキイ）

・南及び北イニルチエク、クユカ
・氷河越え——（K・パウエル隊）
・カラコル荒地、テルスカイ、ア
・ラタウ山脈。

一九三三年

●ウクライナ科学院隊（隊長、M・
・T・ポグレベツキイ）

・カインディ、テレクティ、カラ
・スーの各氷河他

●モスコイ科学院隊（隊長、A・
・レタウエト、W・W・ネム
・ツキイ）

・ブルジェワルスク、ジュウカ氷
・河、ベトロフ氷河、チャキルコ
・ルム氷河、バルコルドイ峰（五
・一〇〇米）、クベルゲンディ峠、

・コマロフ氷河、バルゴフ及びゲ
・リゴルイニ氷河（コクシヤルタ
・ウ山脈）

一九三四年

●W・サツソフ隊

・カノンを含めたサリジャス谷
・モスコイ科学院隊（A・A・レ
・タウエト）（四人）

・コクシヤル谷西部、コマロフ及
・びコクシヤネフスキイ氷河、マ
・ロン峰登頂（四九〇〇米）

一九三五年

●M・T・ポグレベツキイ隊

・ツルゲン、アクス、チヨナシ
・ユ峠、オック及びサリジャス
・谷、マリイ・タルディス荒地
・イニルチエク谷、カインディ、
・カラ・アルチャ、チガル峠、
・キシル・カブチンガイ谷、クユ
・カブ谷、マイバシユ峠、マイバ
・ラク谷、ボスキル峠、テミル
・スー谷、アクス、ベデル峠、イ
・シク湖。

●赤軍山岳兵団

・ブルジェワルスク、ナリンコル、
・バヤンコル谷、マルモールワ
・ント試登——（E・S・レウイン
・隊）テルスカイ・アラタウ山脈
・越え（W・W・ネムツキイ隊）
・セミヨノフ氷河、カラカラ峠、
・ツルゲン、アクス、ブルジ
・エワルスク。

一九三六年

●M・T・ポグレベツキイ指導の
・訓練、教育隊

・ブルジェワルスク、カラコルト
・ル谷、サリジャス及びイニル
・チエク谷。

●A・A・レタウエト隊（六人）

・ブルジェワルスク・カラコルト
・峰、試登（五千米まで）、ツルゲン、

・アクス、チヨナス峠、オツ
・ク谷、カラギル峠、クイリニウ
・谷、サリジャス谷、タルディ
・ス谷、クルトル谷。

一九三七年

●J・M・コロコルニコフ（カザ
・フスタン）隊

・ハンテンリー登頂

●J・M・アバラコフ隊（五人）

・ハンテンリー登頂

一九三八年

●W・W・ネムツキイ隊（三人）

・ブルジェワルスク、カラコル谷
・における登山、カラコルト、ア
・クス峰。

●A・A・レタウエト隊

・ブルジェワルスク、カラコル、
・五二〇〇米峰、チヨナシユ峠、
・ベルクト峠、サリジャス谷、テ
・イウス峠、イニルチエク谷、ナ
・ンセン峰（五七〇〇米）登頂（イ
・ニルチエク山脈）、ソビエト憲法
・峰（五二五〇米、カルピンスキ
・イ峰（五〇五〇米）

●チユチエニコフ隊

・チャバイエフ峰（六三七一米）
・登頂。

一九三八年

●体育スポーツ連盟隊（隊長、A・
・A・レタウエト）

・ブルジェワルスク、サリジャス
・谷、イニルチエク谷、南イニル
・氷河、スウエスドチエカ氷河、
・コムソモール二十年峰、ポビエ
・ダ峰試登六九三〇米まで（ゲト
・マン、シドレンコ、J・イワノ
・フ）

●スポーツ連盟、「クリリヤ・ソ
・ビエフ」隊（隊長、B・シマギ
・ン）（六人）

・コクシヤル谷西部、グリゴリエ
・フ氷河、クリリヤ・ソビエトフ

（ソ連の翼）峰攻撃。

一九四六年

●体育全連盟隊（隊長・A・A・
・レタウエト）

・バヤンコル谷、この地域の氷河
・探査、マルモールワント（六一
・五〇米まで）、クルゴソール（眺
・望）峰、ウスロワヤ（結目）峰
・及びプログラニチユニク（境界
・雪庇）峰の登頂。

一九四九年

●カサク体育委員会隊（隊長、J・
・M・コロコルニコフ）

・ポビエタ峰登路偵察（五七〇〇
・米まで）

一九五一年

●スポーツ連盟科学隊（隊長、J・
・A・カサコフ）

・ブルジェワルスク、バルスコウ
・ン峠、カラサイ荒地、アクス
・イリヤク荒地、イシガルト峠、テ
・レクティ峠、ソ連憲法峰附近、
・サリジャス谷、ウチクル谷、ク
・イリウ峠、カラギル峠、ツル
・ゲン、アクス谷。

一九五二年

●トルキスタン軍団隊（隊長、W・
・I・ラツェク）

・南イニル及びスウエスドチエカ
・氷河、ポビエタ峰登路踏査、チ
・ヤバイエフ峰の登頂。

一九五三年

●カサク体育委員会隊（隊長、J・
・M・コロコルニコフ）

・バヤンコル谷、マルモールワ
・ン峰（六四〇〇米、バヤンコル
・峰その他の登頂。

●トルキスタン軍団隊（隊長、W・
・I・ラツェク）

・南イニル氷河、同氷河上流及び
・ウイソキイ（高い）峠の踏査、

ドルシユバ(友情)峰(六八〇米)、ソ連憲法峰等の登頂。

一九五四年

●カサク体育委員会隊(隊長、J・M・コロルニコフ)

・ハンテンリイ登頂。

●W・ゲセフ隊

・バヤンコル谷、四六五一峰登頂、セミヨノフ峰附近のテルスカイ・アラタウ山脈の山稜に登る。

●スポーツ連盟「クリリヤ・ソビエト」隊

・バヤンコル谷、テルスカイ・アラタウ山脈越えセミヨノフ氷河へ、サリジャス谷、アシユテル峠、バヤンコル谷。

一九五五年

●カサク体育委員会隊(隊長、J・M・コロルニコフ)

・チョンタレン峠よりボビエダ峰の東稜を踏査(六七〇〇米まで)

●トルキスタン軍団及びウスベク体育委員会合同隊(隊長、W・I・ラツェク)

・スウェストチュカ氷河よりボビエダ峰の北稜踏査(六七〇〇米まで)

一九五六年

●スポーツ連盟「スバルターク」隊(隊長、W・M・アバラコフ)

・北稜よりボビエダ峰(ソ連の第二高峰、七四三九米)に登頂(十一人)。

登頂のすぐ後に

沼井鐵太郎

カンチエンジュンガの最高登高

カンチエンジュンガ(八六一六

米)は、一九五五年五月二十五日・二十六日の二回にわたり、英国隊によつてその最高嶺の一端が極められた。頂点は現地民宗教上の約束によつて踏まれなかつたが、それは毫も登攀技術上の困難によるものではなかつた。権威筋では他のたとえばムスター・アータの例にあつたように、このカンチエンジュンガに登頂既知のリストに加えた向もあるようだ。さりながら厳正な科学的取扱の上からみれば、単純に初登頂とは言ひ切れない(会報一八八号所載「続・登山の記録」というもの「参照」)。従つて本稿も最高登高としておくより仕方がなかつた。

隊長チャールズ・エヴァンズ博士の著「Kangchenjunga. The Untrodden Peak」(1956)は、島田義訳・朝日新聞社発行の「カンチエンジュンガ」その成功の記録となつて、昭和三十二年十一月五日、一般日本人にも内容がうかがえるようになったが、訳者の副題名を成功とした一般への心づかいに成功しているだろうか。思考するに、原著者は科学者としての気持と約束通り聖なる頂点に触れることの遠慮から、強い語気を避けて「untrodden」という字にしほつて記載したものであつたろう。その字を単に未踏と訳して考え感ずることに問題がある。真意は「土足にかけなかつた」とか、「踏破しなかつた」とかのセンスであつたらうと了解する。筆者ならば副題名もなしに「カンチエンジュンガ登高」で沢山である。本というものは、本質的研究的には、題名でよりは著者編者と内容によつて読むものなからである。

さて、エヴァンズ隊の登高行は決して安易なものではなかつたが、「予想されたほど困難なものではなかつた。ある程度不可避免的な危険があると思われたところ」が、たつた二ヶ所しかなかつた。……これまで非常に恐れられていたカンチエンジュンガへのたびのルートは、いわば△コロンブスの卵だつたわけである。(「ディレンフルト原著・横川文雄訳・エーデルワイス叢書第六巻「カンチエンジュンガ登頂」、昭和三十一年三月二十五日発行)。総体的にみて、それはヤル氷河から、計算された通りに実行され成功した一例でもあつた。

カンチエンジュンガの第一登頂隊、ジョージ・バンドとジョー・ブラウン二人の若い、岩登りのエキスパートは、標高約二万六千呎(七八七八米)の危つたしがら寝て、八時十五分出発、酸素補給器をつけてギヤングウェイ氷崖から岩場に取りつき、氷から岩場に取りつき、氷のつまつたガリー、側稜、西尾根、岩塔、裂け目と登つて、午後二時四十五分登行終局に達した。

「彼(ブラウン)はその脇の方にある裂け目を選んで、手をつつこんだ。それで体を持上げて、出つ張りを廻つて右へ出た。ジョージは下で見ていたが、その先に何かあるのか全く判らなかつた。突然この壁の上でジョーが振りむいて叫んだ。△ジョージ、着いたよ。△、三分後にジョージも裂け目を登つていつた。二人が立つているところには、灰色の大きな板状の岩が、ブラットフォームを形づくつていた。眼の前、二十フィートほど先きに、二人の立つているところよりも二、三フィート高く、雪の円頂があつた。それが頂上だつた。」

この登頂記には感激の言葉が盛られていない。誠に坦々たる描写である。然し凡そ登頂感激というものは、よしんば二、三呎の高さの差にしろそれを登りつめて始めて強い陽性反応をあらわすものであるべきだと考えられる。まして人類未知の山の上ではないか。

「△最後の二、三フィートを登つてしまいたくて仕方がなかつた、ということではなかつたか△と多数の人達に聞かれたとジョージはいつているが、その答えは△ノー△だそうだが。△第一、わたしはとても疲れていて、あと一歩も進みたくなかつた。が、それは別としても、わたしたちが頂上に足跡を残して来なくてよかつたと思つている。△ジョージはこういつている。△と書かれた箇所には多分に英国人の良識を感じる。登高慾が教養によつて鎮静された場合、山頂到達の喜びは結局定められた目的満足感のみにとどまつて、それもやがてすぐ理性観念になつて行くことが、英国隊の場合の結果が教えているのではなかつたか。

実際第一登頂隊の二人は殆ど頂上同様の最高到達地点から、落ちついて写真を撮影し、展望査察に時を稼いだ。そして時刻は遅かつたので、午後三時きつかりに降りにかかつたが、二人はそれぞれ灰色と黒の斑点が入つた片麻岩を一つずつ拾つた。七時キャンプ帰着、ハーディとストレーザーに「やつたか」と問われたが、当人達はただうなづいてテントの入口の雪の上に崩れるように坐つてしまつたとある。

翌二十六日、ノーマン・ハーディとトニー・ストレーザーの第二登頂隊は、前隊よりも十分に酸素補給器を用意して、快晴に乗り、第一次隊の跡を快進し、場所によつてはうまい雪の回路をみつかりして、出発後四時間足らずで最高到達点に着いた。彼らも登攀の最後が突然やつてきて意外な感じだつたとしている。

「彼らは元氣だつたから、降りも早く行けそうで、日暮れまでには大丈夫第五キャンプまで降りると考えた。彼らはこのまとたない歓喜の時を、急いで切上げる手はあるまいと考え、ゆつくり楽しもうと腰を落ちて、つづつとつたり、坐つて喋つたり食べたりしたが、彼らは第六キャンプにいた時よりも、この方が食欲があるのに気がついた。」

彼らは眺望を楽しみ、五十五分間の楽しい時がまたたく間に過ぎて行つて、空になつた小型ポンペを一つ雪上に残して、ストレーザーのリードで降つて行つた。降りには酸素が切れて苦しみ、第六キャンプ着泊が午後五時になつたのであつた。

このように引用の著書では、第二次最高登高でかえつて登頂感激に類する歓喜を味わつたらしく書かれてゐる。けれど真の登頂見合せの件については一言一句も触れ

ていない。恐らく編輯上当然の省略整理であつたろう。然し本稿全般の推論に含めて、これは一つの考え方として決定を保留した方がよいかも知れない。(一九五七、一一、一、稿)



会 員 通 信

蛇尾谷拾遺

栃木県岳連の河原利勝氏から四月十六日付で、私がアルプ十二号十三号に載せた「蛇尾谷物語」を読まれたこと、最近の同地域の状況等についてお便りがあつた。

同氏は昭和二十四年七月二十二乃至二十六日二名の行、萩平から大蛇尾の七つの砂防ダム乗越で時間をとられ、大流午前の山腹でビバーク、西股から鹿の又ボッチに抜け日留賀岳塩原のコースとなつた、西股も流の連続で面白いが鹿の又の尾根のヤブには閉口したという(関東配電文化会誌に発表の由)。最近又、同氏は社用で大蛇尾、小蛇尾附近を踏査していらるが、昔私達が親しんだ藁沼の印南熊吉氏は中風で臥床中、遅野沢の藤田利松氏は健在とのこと。

大蛇尾は湯宮から林道が開発され、黒磯町の日本木材が目下大カク附近を伐採中。小蛇尾は広河原の奥深くまで森林軌道を通じ黒磯の遠藤林業が伐採している。なお東京電力で電源開発を計画し大蛇尾の水を小蛇尾の広河原附近に導きナベワリ沢を経て藁沼に至り八千キロワットの発電所を建設する予定なので、実現されればこの谷の入口附近は全く面目を変えるであろうし、ナベワリの十三滝も神秘的の衣を脱がざるを得ないだろうという。

なお、私がアルプに寸記しておいたことについて、三十一年八月五乃至八日、横川山岳会、栃木県岳連、日大など、約一五〇名で男鹿岳集中登山の際の日大隊の遭難さわぎは、東股の十二の滝(最大のもの四〇米)を越えて一八八五(独標)附近まで行つて後退したものであつて、登頂記は下野新聞に発表されていると附言された。河原氏のほかにも、昨春秋知合いの若い女性登山家から、仲間の入達と一緒に小蛇尾を歩いて来て面白かつたこと知らせがあつた。昔寂莫としていたあの辺もいづらか登山者が入るようになって、流石に登山道のために私達もうれしくなつたらしい。(一九五九、四、二七)(沼井鐵太郎)

四月役員総会 三日

△場所 本会図書室
△出席者 松方副会長、理事折井浜野、辰沼、太田、越智、野田田村、徳久、評議員 成瀬、藤木、岩永、小原、渡辺、望月、入沢

▽議事および報告
①会員総会の件、四月二十五日午後二時から休協会議室でおこなう。

②次年度役員会の件、三十四年度は国体開催が東京であるので、先輩有力者に理事就任を願う。今年度退任希望理事、故別宮会長折井(東京支部へ)、辰沼、野田、羽鳥、松沢、松田、石坂、村木、新任予定者、三田幸夫、渡辺公平(現評議員)、千谷壮之助、金坂一郎(元理事)、藤平正夫(支部委員)、日下田実、古沢肇(化学工業高教諭)、川上隆(山形支店委員)、高橋進(ヒマルチュリ実行委員)、新任者は会員番号、簡単な略歴をそえて会員に紹介する。
③体協評議員として、入沢文明氏の再任を決定

通常役員総会

昭和三十四年度通常役員総会は四月二十五日午後二時から休協会議室で開催、三十三年度事業報告および決算報告の後三十四年度後算案付議の件を可決、三十四年度理事には日高信太郎、松方三郎、浜野正男、山崎安治、太田敬、松丸秀夫、越智英夫、徳久球雄、田島汎、田村扇一、三田幸夫、千谷壮之助、金坂一郎、川上隆、高橋進、日下田実の十九名を選任。欠員となつていた副会長には三田幸夫氏を決定した。
次に各支部報告として、宮城越後、静岡、関西、東京各部長の現況報告があつた。

五月理事会 六日

△場所 本会図書室
△出席者 日高会長、浜野、太田、千谷、松丸、山崎、古沢、川上、越智、徳久、田島、藤平、高橋田村、辰沼前理事
▽議事および報告
①業務分担を次のとおり決定
総務、渉外、記録、藤平、高橋組織、三田、渡辺、企画、遭難対策、浜野、渡辺、日下田、會計、太田、山岳、山崎、田島、会報、山崎、古沢、図書、松丸、越智、集会、松丸、川上、学生部、千谷、日下田、徳久、国体、研究、田村、金坂。
②海外登山審議委員会として折井辞任。辰沼、藤平二名を新しく推薦する。

③飯田山岳会ランタン・リルン遠征の件は海外登山審議会で審議してもらう。
④皇太子殿下御成婚奉祝スポーツ祭の件
⑤読売新聞社 日本アルプス展覧会の件、六月九日から十四日まで三越七階で開く。本会後援とする。
⑥オニズカ・タイガーシューズ検定の件は条件つきで許可する。
⑦本年度山日記の件、編集委員として加藤元一、甲斐恒夫、高島務、金須久枝の五名に依頼する。
⑧山岳五十三年の件、六月中に発行する。
なお常務理事として浜野、太田山崎、金坂、藤平の五氏を選任する。

五月理事会 十九日

△場所 本会図書室
△出席者 日高会長、理事 浜野、渡辺、金坂、藤平、古沢、田村、太田、山崎、松丸、越智、高橋、川上、日下田、田島、折井東京支部委員長、交野評議員
▽議事および報告
①飯田山岳会ランタン・リルン登山の件、日本山岳会としてはネパール政府にリコメンデーションを出さない。
②第十四回国体委員会の件
③皇太子殿下奉祝スポーツ祭パレードの件、五月十八日国立競技場で行われるはずであつたが雨天のため東京都体育館で開かれ、山岳会としては日高会長、三田、松方副会長、神谷、村井会員らが参加した。
④有志晩餐会の件
⑤日本教育テレビ夏山講座の件、六月二十一日・二十七日毎日午後一時から二十分間行。本会より解説者として横有恒、松方三郎、浜野正男、辰沼広吉、村井米子、金坂一郎、山崎安治、藤平正夫、依田孝喜の各氏が協力する。
⑥チゴリザ映画有料試写会の件、委員を設け東宝側と折衝する。
⑦ヒマラヤ文獻展。六月一日・六日丸善で開く。

第一九三回小集会

第一九三回小集会は三月十四日午後五時半から休協会議室で中尾佐助氏の「プータン旅行談」があり、スライド並びに現地録音による現地民の歌が紹介された。

マナスル整備展 去る十二月十日、ニューデリーにおいて印度日本友交協会主催のもとに一九五六年第三次マナスル登山隊使用装備の展示会が開催された。これは一九五六年末ニューヨークにおける国際見本市に出品、その後欧米各地を順次展示してきたもので、現在印度の登山界が日本の登山整備に注目している時であり、その成果が期待される。

(三三・一二・二五松田)

◇横氏米山岳会名誉会員に

アメリカ山岳会では昨年十二月六日(土曜日)フィラデルフィアのベレニュー・ホテルにおいて年次総会を開きジョン・C・オバーリン氏にかわるロバート・H・ベーツ氏の新会長以下役員の改選を行った。

その後十二月二十三日付同会セクレタリーのローレンス・G・コンベニー氏からつぎのような嬉しい知らせが、当会気付にて横有恒氏宛届いた。

「アメリカ山岳会理事会では、一九五八年十二月六日、貴殿を名誉会員として当会に御招待致すことを満場一致で決定致しました。貴殿の御名前は長く登山技術の最高の方と見なされています。貴殿が理想的なスポーツマン・シッブ・人格・寛大さという登山が助長すべきであり、又現に助長している全ゆる精神面の長所をそなえておられることは、非常に大切なことであります。残念なことに我

々の仲間では、貴殿を個人的に存じ上げる機会に恵まれたものが、非常に少ないのであります。しかし我々は皆、貴殿の名を非常によく存じ上げており、貴殿が私達の申出を受けて下されば、非常に名誉なことと存ずる次第であります。貴殿が当会名誉会員であるために必要な事務をよく御存知になれる様に、会の定款を一部同封致します。この一七―一八頁を読んでいたければ幸いです。

私は、われわれの申出を貴殿が御受け下さることを望んであります。若し御承諾願えるのであれば貴殿の御都合の宜しい時で結構です。若し御都合の宜しい時で結構です。若し御都合の宜しい時で結構です。

それ以上は存じません。敬具」

アメリカ山岳会の名誉会員は一九五八年度は次の十二名よりなりこの度の同会による横有恒氏の推挙は我々日本山岳会としても、非常に光栄なことである。

〔一九五八年度A・A名誉会員〕
ベルギー皇帝レオポルド三世、チャールス・エヴァンス、ヘンリー・S・ハル、モリス・ヘルツォーグ、サー・ジョン・ハント、N・E・オーデル、エリック・シブトン、H・W・テイルマン、J・M・ソーリンソン、H・B・ウォッシュバイン、サー・H・ウィルキンス、G・W・ヤング。

◇ヒマラヤン・ジャーナル購入
待望のヒマラヤン・ジャーナル第二〇巻(一九五八年版)は昨年

末、マナスルの報告をのせて刊行されたが、この程丸善古書部に第

一巻より一九巻迄のコンプリート・セットが入つたので、当会では資産として同セットを購入することにしました。現在会にはヒマラヤン・ジャーナルは十九巻のみしかなく、久しい間、同書のバック・ナンバーを揃えることは待望されていたものである。会では新購入の一九巻に二十巻を加え、これを九冊に合本して図書室に揃えることにしたから、ヒマラヤンに関心を持つ各位の御利用を御待ちする。

(松田)

◇エヴェレストの新地図

エヴェレストの二万五千分の一地図については会報二〇〇号に吉沢一郎氏によつて紹介されたが、当会ではドイツ山岳会より寄贈された同地図を大型の額に入れ図書室に備えることにした。同時に五万分の一「マナスル」も額入れにしておいた。

◇会報の製本

会報一五五号―二〇〇号の製本を引受けました。御希望の方は総目録を添え事務所までおもち下さい。

・価格 一部四〇〇円
・体裁は従来のもと同じです
・なお郵送御希望の方は左記の書留小包郵便料を必ずお添え願います。

一二五円―北海道・九州・山

一〇五円―青森県・岩手県・

四五円―東京・都内

九〇円―右以外の地域

× × ×

東京支部便り

蔵王スキー行

一月三十日より二月一日までお忙がしい安彦さんに御無理をいして、蔵王へ行つていただきました。同行は婦人部の三枝さんと大貫さん。

山形で下車すると、まだあけきれない駅の広場は一面の銀世界で、雪国らしい灰色の空からはあとからあと雪が降りつづいていきます。高湯の旅館に荷を置いてグレンデへ出てみると、昨日雨だったとか、十種位の新雪の下はクラストしているところもありました。

リフトにも乗らず安彦先生御指導のもとひたすらにあやしげな腰付きで回転などやつてみたけれど、本当に「スキーよ、汝、魔法のイタよ」と嘆息致しました。

次の日、ケープルで霧氷の美しいドッコ沼を経、鳥兜のリフトの上の手頃な斜面をならして、山廻りクリスチャニヤやパラレルの練習。ここは素晴らしい粉雪で、やつとパラレルで転ぶようになりました。

昼食はバラダイス・ロッジでデラックスなランチをたべて、大にここでごさんげ坂を登りましたが、ひどいガスで、地蔵手前の峠から引返しました。樹氷も、囲りのものがぼんやり見えるだけで本

当にがっかりしました。「かついで下るのも一つの技術ですよ」と仰る先生のお言葉を有がたくお

受けして、スキーはガスの晴れて
いるざんげの下までかつぎ、それ
から大平コースを滑りました。無
数の転倒を予想していた割にはま
あ普通に滑れて、やつとスキーが
面白くなってきました。
(山口節子)

日光白根懇親山行

三月二十日、東武浅草駅に集合し
た、われわれ十余名は、二四時三
十分発の山岳夜行電車の人となつ
た。走り行く車内の暖房は、全た
くきかず、速度が加わると共に、
その寒さを増してきた。誰れ彼れ
となく、ザックより一枚一枚とり
出し、遂にはビバークの体勢です
いみんをとる事に努力した。
電車は走る事約三時間、夜明け
にはまだ早い東武日光駅につい
た。いつものまにか、中禅寺湖、戦
場ヶ原もすぎて、湯の湖が静かに
その姿をあらわしたところ、皆な思
い思いに、目をさました。
湯元についてわれわれ一行は、
第一ゲレンデに向つた。ここで朝
食をすませ、大切に持ってきたス
キーと、二、三個にまとめた荷物
とをあづけた。

午前八時、めざす白根山へ第二
ゲレンデから中曽根新道を登つ
た。一時間歩いたころ、湯の見平
についた。

快晴に澄みきつた青空の下、女
峯、男体山、大真名子、小真名子、
太郎山と続く山なみは実に美しく
眼下の湯の湖と共にわれわれの目
を楽しませてくれた。ここで、し
ばらく休憩の後トッパをかえなが
ら前白根に向つた。
前白根に近づくと頃より雪も深さ

を増し、あたりの木々にのこるつ
ららはわれわれの喉をうるおして
くれた。前白根の鞍部で昼食をと
ることにした。このあたりは、遠
く尾瀬の山々、越後の山なみが銀
色に輝き、近くは奥白根の白い岩
壁が春の日に照り映えてなんとも
言いようのない心地にさせられ
た。

昼食後、少しも疲れを見せない
女性の人々がトッパになりつつ、
前白根山頂をきわめ、奥白根と進
んだが、時間の都合上奥白根をま
のあたりに望み、われわれがなづ
けた中白根の地点から帰路につい
た。その夜は女性の人々の心から
なる御馳走に、舌鼓をうちつつ食
事をとって、怪談やら諸々な話に花
を咲かせいつとはなしに、光徳小
屋の一夜を明かした。
翌朝、悪天候のため、太郎の登
頂をやめ、スキーを楽しみ、午後
一時頃東京に向つた。(中保)
マ参加者 野田、藤平、芳賀、佐
藤、三枝、山口、大貫、北原、
沢田。

北八ツ岳懇親山行

六月二十日(曇後雨)

黒百合平の小屋前の斜面には、
斑雪が残っていた。六月の中旬だ
というのに、岳樺の若芽はまだ固
くしまつていて金茶色の幹肌がし
らじらと寂しい。浜からここまで
一時間余り十時半を少し廻つてい
た。登るにつれて次第に雲行は怪
しくボツリボツリ降り出した雨足
は東天狗に着くころ、無数の銀糸
に替つていた。横なぐりの強風が
うなりをあげて尾根を渡つてゆ
く。礫石岳を過ぎ、箕冠岳の樹林

帯に入つた時は、全くの所はつと
した。夏沢峠をへて四時黄連小屋
着。

小屋に足を入れたとたん、車軸
を流す雨、雨、白いしぶきをあげ
て走る雨足は、すさまじい。新藤
や露の山菜で食事が終る頃、雨は
うその様に晴れあがつていた。樹
林の狭間の上を、とき色を含んだ
青の空が帯の様に流れていた。明
日は上天気と小屋の若者が約束し
てくれたので、すっかり気を良く
した一同、横岳から海口の牧場へ
の今回のコースを一足伸して、赤
岳から野辺山へ降る変更案に全員
の賛成を得る。佐藤リーダーもO
K。夜半それはそれは青い月が、
夏沢峠の辺りから昇つた。
六月二十一日(曇)

七時硫黄岳のコルに着く。残雪
の北アが遙かな雲上にある。眼
交を落せば、夢科山、佐久平の辺
りが緑一色に静りかえつていた。
指呼の間に、阿弥陀、中岳、赤岳
は白いベールにその顔をかくして
いた。硫黄岳を過ぎる頃からまた
してもガスの濃くなり視界が閉ざ
れてしまふ。九時半赤岳頂上着。
頂上小屋横のさつかけの中に絵葉
書とスタンブを前にして、鼻眼鏡
の親爺が座つていて前を通ると、
すかさず「お疲れ様、スタンブの
方はタダですから」と声をかけた。
つられてその無料のスタンブを恭
々しく押させて貰う。
長い県界根の針葉樹林帯を降
つて舟山口の辺り迄事と、緋の
つじの群落帯となる。焙と燃え
るその紅は両側の黄緑の落葉松林
の中深く広く溶けこんでいて、ル
ノアールのあの明るく楽しい赤と緑

の色調を想い起させる。
おどかで、そして幾分甘い香
り、それが一脈の哀愁に包まれて
幽かに生きづいてる六月の八ツ
岳の裾野は、今が最盛期であつ
た。
リーダー佐藤安男 以人五人
(磯崎瑠璃子)

会務報告

- 二月四日 会員懇談会
マスキー計画打合せ 映画「富士」
観賞会の件について(野田)
- 二月十八日 理事会
マ八ヶ岳峰スキー講習会報告
○二月二十六日 婦人のつどい
マスキー講習会報告
- 三月四日 会員懇談会
マ次期役員推薦の件
次回懇談会を「高山植物の話」
山下一夫氏に依頼
- 三月十八日 役員総会
マ次期役員選出の件
- 三月二十六日 婦人の集い
マ冬山計画打合せ
- 四月一日 会員懇談会
マ「高山植物の話」 山下一夫氏
スライド 映写 春田俊郎氏
- 四月十五日 理事会及び懇談会
マ「エスキモーの生活」
カナダ大使館提供映画
- 四月二十三日 婦人のつどい
マ春山計画について
- 五月六日 理事会
役務分担決定
- 五月十五日 新旧役員総会
- 五月二十日 会員懇談会
会員のスライドを映写
- 六月三日 理事会
映画「ゴリザ」上映の件

東横デパート夏山相談所開設
の件

マ六月懇親山行の件(八ヶ岳)会
員懇談会テーマについて(ア
フリカ横断のスライド 後藤
重子氏)六月十七日)

◎お願い 山行報告その他原稿中
地名及び山名にはふりがなをつけ
て下さい。(坂倉)

昭和三十四年七月十日発行

東京都千代田区
神田駿河台四ノ六
社団法人 日本山岳会

発行人 山崎 安治
編集者 山崎 安治

頒価二十円 電話 神田25(八五二番
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂溜池五番地
印刷所 株式会社 技報堂



NYLON
TENT
SKI & MOUNTAIN
GOODS

SUDACHO. KANDA. TEL (25) 6428